
星の池

神崎久遠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の池

【Nコード】

N7431B

【作者名】

神崎久遠

【あらすじ】

主人公の山野秀^{ヤマノ・シュウ}をはじめとする、人物たちの恋物語。複雑な人物関係の中、シュウは青き学園生活をすごせるのだろうか……。

多くの星達の青い物語。果たして星達の恋の行方は……！？（前書き）

自分の実力100%を出した作品ですが、まだまだ未熟。皆さんの力でこの作品を120%も200%にもしてください！

多くの星達の青い物語。果たして星達の恋の行方は……！？

黒く染まった川を見上げ待ち望む日々は

とても長く、とても短かった

君を恋しく思いながら見上げた川

悲しさや苦しみでいっぱいだった

でも、小船がやってくると

大切な物を見つけられた気分になれる

ああ、今日もどこかで流れる小船が一つ

アニメ等でよく流れ星を見かけるが、僕は流れ星を一度も見ることがない。別に、流れ星があるということを感じていないわけではない。ただ、この十五年間の中で一度も流れ星を見ていないだけなのである。自分だって一刻も早く流れ星というロマンチックな物を見たい。

そして、今日は学校の勉強という利口で手強い敵を早めに倒し、ベランダに出た。少し寒い、身を縮める自分。流れ星を見たい。僕は、手の平に白い息を吹きかけた。そして、両手をポケットに入れ、雲一つ無い夜空を見上げた。口という煙突から立ち上る白い煙。そ

れで、僕の目に映る綺麗な夜空は度々、かすれ、白い煙が消えるとまた綺麗な夜空が見えてくる。その繰り返し。

しばらく経つと一階から母の声がした。なにを言っているのか分からない。すると、下からカレーライスのにおいがした。ああ、夕飯か。また、流れ星を見られなかった。残念という気持ちでいっぱいな自分はベランダのドアを開けたまま一階へ向かった。

僕がカレーライスを頬張っている頃。開けたままのベランダから臨む夜空にシャンと流れる星が一つ。

吐く息がまだ白い朝の日。僕は中学校への通学路を……と言って、地下鉄で四十分。

特に何もすることの無い僕は携帯電話のゲームで時間を潰していた。

多くの人が降りる駅に着くと、もう、車内はガラガラ。

「山野、おはよう」

友達の高田が電車に乗った。高田とは厳しい中学受験を乗り越えてきた仲である。今は、野球部に入っているようで、自分も高田から“優勝した”と言っ言葉は何度も耳にしたことがある。

「おはよう、今日は、野球の朝練ないの？」

“うん”と言うように頷く高田は自分の隣に腰掛け、自慢のあくオスケータイで天気予報を見ている。岩原良墨さんの天気予報では、今日は雨となっている。

「一応、他の予報も見たら？」

僕が言うと高田はクスツと笑った。

「良墨さんは当てにならない、と……」

高田はチャンネルを回した。すると、他の予報では、今日は晴れになっていた。

「ナイス、山野」

僕たちは笑いあった。

多くの星達の青い物語。果たして星達の恋の行方は……！？（後書き）

第一話、最後までごらん頂ありがとうございます。

コメント、よろしければ……。

コメント、頂くと久遠が狂ったように喜びます。

『わかりません』(前書き)

第二話です。

『わかりません』

数学の時間。

教室には、先生の持つチョークが黒板に打ち付けられている音のみが響いていた。

小林先生は特にうるさいわけでもないけど、黒板に書かれてある数字や記号を見ているとかつたくて、しかたがない。僕は教科書で顔隠していた。別に寝ようとしているわけではなく、ただ、つまらないからだらけているだけだ。一番後ろの席だし、ばれる事もないだろう。チラッと時計を見ると、もう少しで授業が終わる。次は得意な英語……。次の時間は本当に寝てても良さそうだ。

「そして、ここがこうなる訳だが……」

先生はこつち側を振り向いた。誰を当てるのだろうか。

「それでは、山野。ここ、解いてみなさい」

「え、僕ですか？」

先生は頷いた。僕はため息をついてから、立ち上がり、黒板へ向かった。先生は寝ていたのに……、というような表情を浮かばせている。まったく、この僕を舐めるなよ、小林先生！僕は黒板に大きな文字で

「わかりません」と平仮名で書いて、自分の席へと戻った。

「な、なんだね、山野君」

「わからないから、そう書いたんです」

真面目に答える自分。前の席のミスキはくすくすと笑いをこらえ切れずに漏れる声が聞こえる。

「……もういい、それでは、桜井。君が解いてください」

前で笑っていたミスキはドンと立った。予想外だったのだろう。様見る。しかし、ミスキは簡単に解いてしまった。

「よくやった、席に戻っていいぞ」

なにー！？……僕のほうが予想外だ。隣の高田も僕の気持ちを察し

てか、くすくす笑っている。

（おのれ、二人とも覚えている。次の授業は英語だ。一泡吹かせてやる）

数学の授業が終わり、十分の休憩時間。予想通り、前のミズキがからかいに僕のほうを向いた。

「あらあら、なんで優等生でもあろう秀君があんな簡単な問題をわからないで？」

思い切り、からかう素振りをしてくる。まったく、ひねくれている性格だ。だが、鉄道研究部や模型同好会などの奴等は、ミズキの事を萌えキャラだとか言っている。こいつのせいで、かわいいのが萌えなのか、ひねくれているから萌えなのか分からなくなってしまった。長い髪を束ねてポニーテールというやつ、それが腰まである。ミズキはそれが邪魔ではないのだろうか？ まあ、自分も男子としては髪は長い方だが、せいぜい肩までだ。ミズキとは小学生からの幼馴染ではあるが、中学にあがるまではあまり話したことは無い。まあ、話すといってもあつちからからかう程度だが……。

すると、外国人特有のなまりがある英語の先生がやってきた。本名は校長にしか知られていないそうだが、先生たちからはミラと言われている女の先生だ。美人だから、英語が得意というわけではなく、小学生になる前まで、アメリカで生活していたからだ。父親の都合で。だから、教師が美人だから、その先生のする授業はしっかりと聞くという変態ではない。それだけは言っておく。

『わかりません』（後書き）

読んでくれてありがとう。

最後まで読んだからにはコメントを……
なんていいませんよ。

よろしければ、コメントください。

久遠が狂ったように喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7431b/>

星の池

2010年12月31日07時31分発行